

日本福祉文化学会をどう紹介しますか？

永山 誠

1. 社会福祉系学会連合のこと

日本福祉文化学会の「しおり」（冊子）があります。上野千鶴子先生の講演（東京大会）の際、本学会の紹介文がわかりにくいという感想をいただき、「旧版しおり」が改定されました。藺田碩哉先生が精魂をこめて新たな紹介文を書き上げられた。「新版しおり」の「はじめに一福祉文化研究の目指すもの」です。これは本学会の福祉文化実践学会賞の選考上の「参考基準」として位置づけられています。本学会の趣旨を伝えるうえで大事な文章かと思えますので、ご一読をお勧めいたします。本学会が30年近く積み重ねてきた論議を整理し、初めて福祉文化の研究方法に論及した点が特徴だと思われます。

社会福祉系学会連合という組織があり、22学会が参加している。もちろん他にも学会組織はある。社会福祉系学会連合は学会間の連絡・交流、あるいは日本学術会議等と福祉系学会との対外的な窓口の役割を担い、実務は運営委員会が処理しています。私はこの6月で運営委員の任期を終えました。

運営委員会の仕事は予想より多くありましたが、合理的な運営がなされ、トラブルなどなく、個性ある学会の方々に構成されているのですが、意思疎通も障害なく、気持ちよくしごとができました。ありきたりのことですが、みなさん意見はよく聞き、これを受け止め意見交換をしていたので、なぜか共感をおぼえました。学会運営としては普通のことですが、これはとても大事なことだと感じた次第です。サークル運営とは違う学会のよいところだと気づきました。

2020年3月、運営委員会の事務局長から「日本福祉文化学会の紹介文を書いてほしい」という依頼があり、数日しかなかったのですが、書きました。運営委員の方々から「興味深い」等の感想をいただきました。わかるのですね。他学会向けの紹介文なので、「しおり」とは異なる視点で執筆しました。

1990年代に一番ヶ瀬康子先生と仲村優一先生に相談し、世界の福祉の歴史と現状がどうなっているか、月1回、年10回、ゲストを迎えた研究会をしたいかと提案しました。その結果、終わってみると3年余継続しました。両先生は一回も欠席せず、報告にもとづく討論ではよく意見交流をされました。一番ヶ瀬先生は日本女子大学が定年で、東洋大学に移られ時期だったかと思います。熱気を感じました。お二人とも吉田久一先生のお弟子さんで、しかも戦後社会福祉研究を先導されてこられた。これまで欧米北欧中心の研究で日本の福祉課題に対応し発展させてきた。アフリカ、南米等は視野になかった。キリスト教、ヒンズー

教、仏教、イスラム教、儒教等の違いも興味深いものでした。視野を一步広げ、情報を開放的に得ると新たな課題もわかる。研究会に参加した文化人類学者いわく、この研究会は福祉研究史上「画期的だ」。私も驚きました。たしかに福祉研究者と文化人類学者が「福祉」を共有し共感が生まれ、私にとっても高揚感が持続した3年間だった。

福祉研究は介護、障害、高齢、子育て等分野別に限定し研究を深めることが専門性の証だと誤解する方々が非常に多い。他領域と福祉を共有しようとする意識も忘れてはいけないのではないか。そんなこともあり、他領域と「福祉」の考え片を共有することも福祉文化の課題ではないか。忘れかけていた1990年代の記憶です。

2. 私の「日本福祉文化学会の紹介」

私が『社会福祉系学会連合のニュース』に「福祉文化研究が」めざすもの」(しおり)を念頭に、執筆した「日本福祉文化学会の紹介」を参考までに掲載いたします。

2020.3.11

「日本福祉文化学会」のご紹介

永山 誠 (日本福祉文化学会副会長、
社会福祉系学会連合運営委員)

(1) 日本福祉文化学会の創設は、福祉が生きることへの包括的・文化的視点が薄れつつあることへの危惧から1989年に一番ヶ瀬康子先生(故人)らの提案によります。1980年代「福祉研究の危機」意識が広まるなかで、福祉のゆがみを文化の視点で見直し、改善する実践を指向した。カルチュラル・スタディーズのイメージが参考になるかもしれません。

創立31年目の全国大会<沖縄>は本年11月28日(土)、29日(日)の開催です。沖縄の歴史、文化、女性、生活をふまえたシンポジウム、現場セミナー、研究プロジェクト報告等が予定されています。後日、学会HPでご確認ください。通常、ブロックごとに文化としての福祉実践を発表する現場セミナー、研究会、シンポ等を企画・開催しています。発表の手段は研究誌、書籍刊行、HP福祉文化批評等です。本年度からブックレット刊行、投稿論文作成支援、添削指導を試行予定です。

(2) 何をめざす学会か、とよく聞かれます。福祉文化が造語だからでしょう。まず「福祉」とは何かです。誰もが必ず考えますが、福祉概念は典型的に言えば二つある。「生存権にもとづく社会福祉」と、1970年代以降の「政策側の新たな概念」です。公的な福祉概念をチェックせず、一気に調査や政策研究、実践に精力を注ぐのが普通です。気持ちはわかりますが、将来これでうまくやっていけるのか一抹の不安をおぼえます。

福祉概念の研究業績をみると1974年日経調桜田委員会報告書『福祉とは何か』で新たな福祉概念(=価値福祉)が提示される。これを念頭に21世紀型地域福祉(社会福祉法制)の基礎となる東京都地域福祉計画等検討委員会報告書(1988-89)が策定される。これをフォローすれば福祉理解の平衡感覚がいくらか取り戻せるかと思えます。

次に「福祉文化」という用語です。1989年は日本福祉文化学会の創立、そして福祉文化の用語が公文書で初めて使われた年です。「福祉文化」は実は双子です。ご存知のように21世紀の公的な「福祉=地域福祉」は地域の個性ある文化の創造、すなわち福祉文化の創造が政策目標です。意識するしないにかかわらず、地域に公的「福祉文化」が築かれる。新たな価値体系を地域社会に築く文化運動といってもよい。「福祉文化」は21世紀福祉のキー概念といえます。本学会の研究対象を私はこう説明しています。

(3) 公的な福祉の概念を理解すれば福祉文化の意味もわかるし、地域共生社会の研究も当然このプロセスが大事になるかと思えます。「福祉文化」は私たち共通の用語です。21世紀の福祉の研究と実践は、公的な福祉や福祉文化を<価値鏡>として自らの研究を進めることが、研究や実践の効率化の一つの方法かと思えます。本学会はこのような課題を抱えながら苦労を重ねています。

(了)

* 『社会福祉系学会連合ニュース』(2020年3月号)。本文は原文のまま、肩書の補充、数字の誤字訂正のみ行った。

3. 福祉文化研究のめざすもの

本学会の「新版しおり」の「はじめに一福祉文化研究のめざすもの」を以下に全文ご紹介いたします。最近、これを読み直し、本学会の皆さんが本学会を自分の言葉で紹介するとしたら、どういう表現になるのか、そんなことを思います。福祉文化については、様々な理解、考え方があります。「私はこう考えている」「○○さんの考えと私はここが違う」等々の話題を「福祉文化時評」に投稿し、意見を交換し合う。こういう提案はいかがでしょうか。自分のことばで「私の日本福祉文化学会の紹介」を書き、福祉文化批評に投稿する。

新たなロマンが生まれるかもしれません。本学会高知大会準備で、「激論！福祉文化」という企画をやろうと思いましたが、「やめたほうがよい」との強い助言があり、時間切れで中止した。2000年ですから20年がたちました。他の会員の有力な意見がいくつもあるので、ぜひ紹介していただき、共有できないものでしょうか。福祉文化を語らない日本福祉文化学会というのも気になるので、どうかご教示ください。

はじめに：福祉文化研究の目指すもの

わが国の社会福祉がさまざまな問題を抱えていることは誰もが認めることです。福祉文化研究は、福祉の改善・改革を「文化」の視点から検討することを目指しています。1989年に設立されて以来、日本福祉文化学会は「福祉の文化化」と「文化の福祉化」という言葉を掲げて、「福祉」と「文化」の対話をテーマとして理論的また実践的な研究を積み上げてきました。

「文化」という用語は単純なものではなく、異なる意味を含んだ多義的な言葉です。それはまず、人間社会のある領域の固有な生活様式を意味しています。この意味での「福祉文化」は福祉領域に典型的にみられる考え方や行動の特徴のことです。一般社会の文化と福祉文化を比較検討し、福祉領域における文化的な偏りを見つけ出すのが一つの課題です。

「文化」はまた、人間生活に関わるさまざまな価値—学問や芸術や宗教や公共性など—を追究することでもあります。福祉領域においても知的な創造やアートの実践や相互扶助の充実など、多くの課題があります。そうした福祉領域の文化的な活動をどのように生みだし、どう発展させるかということも重要なテーマです。

日本福祉文化学会は発足以来、全国各地の福祉現場の実践家と福祉系を中心とする大学等の研究者の強固なネットワークを作ってきました。それを基盤に本学会は、福祉領域の文化的な貧しさを指摘し、その背景と原因を探っていきます。同時に、そのような現状から脱却するための理論構築と実践方法の開発を進めます。少子・超高齢化をはじめ、社会問題の複合化が進むこれからの日本社会において、文化的に豊かな福祉を創り上げ、広めていくことが、本学会が果たすべき使命であると考えています。本学会の活動に共感する多くの実践家と研究者の参加を望みます。

(日本福祉文化学会パンフレット 2018年版「はじめに」より)

以上